

投句欄 自由律の泉 ㊥

- | | | |
|----|-----------------------|---------|
| 1 | 巨船見上げ藤壺ひとつ我となる | 一の橋 世京 |
| 2 | 私をなんと思ったか肩の蝶 | 青井 こおり |
| 3 | 故郷訛で嘆く スマホの向う側 | 見崎 厚志 |
| 4 | とぎれとぎれの思い出と生きる | 富永 鳩山 |
| 5 | 棚経の燻ら香らせ両の手合わす | 田中 直心 |
| 6 | どうやら慣れてきた5ミリカットの坊主頭 | 白松 いちろう |
| 7 | 少しだけ外れたものに惹かれている | 富永 順子 |
| 8 | 高級スーツピシッと決めて議員さんの赤い羽根 | ちば つゆこ |
| 9 | 蕎麦の花永遠がありそうな錯覚 | 黒瀬 文子 |
| 10 | 薄笑い 耳が遠いのは内緒です | 平岡 久美子 |
| 11 | また今日もいまからビール朝三時 | 大岳 次郎 |
| 12 | 平穏な一日という薄氷 | 久光 良一 |
| 13 | 言霊の月光を投函する | 野谷 真治 |
| 14 | 晩夏の空にみちるほど草の川 | アカホリ フキ |
| 15 | だんだん忘れていくあなたと生きる秋 | 原 鈴子 |
| 16 | 胸にくるんで消せない懐い | 植田 鬼灯 |
| 17 | やられたからやり返す猫のケンカも戦争も | 金澤ひろあき |
| 18 | 民宿を閉じ老夫婦帰雁に手を振る | 小山 榮康 |
| 19 | 忘れた頃に身近でコロナ | 無 一 |
| 20 | 難儀やろ 亡母の声する日暮れ坂 | 原 さつき |
| 21 | さらば科学よ今夜の月は美しい | 泥谷 文吾 |
| 22 | 負けないで 台風に叩かれてもジンジャー咲く | 増田 壽恵子 |
| 23 | 信じて老いて悟る道 | 竹内 朋子 |

●泉²⁴より 一句鑑賞

24 貼り付いて動かないバッタ 名が出て来ない 鈴木 和枝

25 君と登った山に今一人登っている 池田 恵三

26 子鳥の発声練習いつの間にか秋の空 山本 説子

27 妻よ そんな想いをのみ込んだままだったのか
そのべ 千羞

28 陰が手を振る月の木陰 木村 浩

29 枯れ枝ふりふり少年へ還ってゆく 佐瀬 風井梧

30 ふわっと秋風 生きるを味わう 部屋 慈音

31 柚子風呂の中片手に命の水スーパームーン 荻島 架人

32 ほほえみの形に唇を描く 篠原 紀子

33 連れては行けない苗に水をたつぷりと 佐川 智英実

34 ひたひたと足音あなたは誰ですか 井尾 良子

35 怒鳴った妻に翌朝の「おはよう」 新山 賢治

36 纏めるすべもなくよわい七十二の詫び状 平林 吉明

ここを起点に未来に向かって太い線をひく 久光 良一

▼どんどん老いて行く自分に仕方無いと過ごしていました。でもこれではいけない。何事も前向きに考えないとだめだと思いはじめた時この句に会いました。どんな線になるか頑張ります。(増田 壽恵子)

葬儀の翌朝の雨を聴く 金澤ひろあき

▼雨を聞く の中に故人を見送るまでの作者との歴史を黙思する様子が、静けさと少しの肌寒さというシーンの中に、故人を見送った心の重さが手に取るように見えてくる。

▼内容がすぐに伝わって、判りやすい句です。雨を聴くは亡くなった人と雨を聴きながら対話されているのでしょうか。しんみりとしたすてきな句です。(そのべ 千羞)

思春期 鶴折る子の遠い目 原さつき

▼昨日までの自分と違うものになっていく時期。性を意識したり、自我が生じたりする。成長と共に不安、時には混乱も生じる。「遠い目」は、それらを映し出している。(金澤 ひろあき)

土砂降りの梅雨 心もずぶぬれ 増田 壽恵子

▼異常気象ばかりでなく、車優先社会で古民家の囲りの道路はかさ上げされ、ちよつとした大雨でも床下まで水が流れ込む。十五年前自然を求めて都会から田舎へ。ポロ家を買って住んでいるが、その被害は増すばかりである。(泥谷 文吾)

じたばたせず次の日に忍び込む

一の橋 世京

▼近ごろじたばたしてばかりの日々です。日付が変わる時間になってしまっても落ち着いて、次の日にこっそり入り込むように静かに眠りにつきたい、秋の夜とも感じられる一句でした。

(篠原 紀子)

▼今更悔やんでも仕方が無い。過ぎ去ったものより次の一手に忍び込む。まだまだチャンスはありますよ。

(白松 いちろう)

頭などで3ミリカット生きてるを感じつつ

白松 いちろう

▼日々、「いのち」と向き合う作者の、切実で愛おしい思いが真っ直ぐに伝わってくる。深謝します。

(新山 賢治)

夏の雨たぶん自殺はしないと思う

平林 吉明

▼深刻なことをさらっと言っている。どれほど苦しんだかは分からないが、何かを大切に思う心がささえているのだろう。句としてはき出すことが、助けになっているのかもしれない。

(原 鈴子)

母に似ていく／姉を診ている／病室

見崎 厚志

▼私の妹も重い病いで死にましたが、最後に近い頃の顔が死んだ母の顔にとってもよく似ていました。顔つきが似ているとは思わなかったのに、最後の時にはこんなにも似るものかと、親子のつながりの強さを感じました。

(久光 良一)

動かぬ眼が見つめてくる

小山 榮康

▼短い文章の中に沢山の言いたい事、感じる事が詰まっていますね。長いストーリーを感じます。

(見崎 厚志)

▼もしかしたら話もできなくなっている、自分の体も自由に動かすこと

ができなくなっている人がじっと見つめてくる、なんとも言えない迫力があります。「施設の姉を見舞う」という前文があるので具体的な状況が浮かぶのですが、なにも解説しなかった場合は、むしろいろいろに解釈できて深遠な雰囲気醸し出すかもしれません。

▼母を思い出させて頂きました。何かを訴えているような動かぬ眼でしたが、見舞う度に耳元で母の好きな歌を歌ったり、親族の近況を話したりしていますと、だんだん穏やかな眼になり優しくなりました。

(山本 説子)

▼四年前に亡くなった母を思い出しました。一週間に二回お昼ごはんを食べさせ歯をみがき、そして私は母の好きだった歌を唄う。目は笑っているように見えるけど言葉は発しない。いつかはと通った六年。あの時何と言いたかったのか。作者も私と同様知りたいのでは…。(井尾 良子)

富永 鳩山

鳴きながら落ちた蟬の横に座る

▼この蟬の横に座っている心情を、しばし、様々考えさせられた。哀しい句です。

(野谷 真治)

▼とても切ない句、あれほどうるさいと思っていたのに、蟬の命は短くて、きれいな姿のまま動かないのを見ると、一瞬立ち去れなくなりました。

(原 さつき)

蝉の声子供頃聞いたセミの声

岩井 汗馬

▼懐かしい田舎風景を想像しました。「蝉の声」に俳味を感じました。

(アカホリ フキ)

石に聴く きみどこからきたの

新山 賢治

▼分かります。同じ事をしています。石、好きなので。

(木村 浩)

▼きつと私より早くからこの青い地球にいたはずです、教えてほしい！
この先のことを。
(平岡 久美子)

山際より滝のごと雲は流れ

湯原 柳泉洞

▼大きな自然の句はいいですね。老心が癒されました。(小山 榮康)

送り火の空沢山の星に迎えられ

山本 説子

▼お盆の最後は送り火をたいて亡くなった人を煙と共に空へかえす。ある地方は川へ灯籠流しをし、ある地方では空へ紙風船の灯りの灯籠を上げる。作者は後者であろうか。星空へたくさんの灯りが上がってゆく景がみえるようである。
(佐瀬 風井梧)

泣いて泣いて八月はたまごかけごはん

井尾 良子

▼どうして泣いているの？貧乏なの？暑くて酷いの？それとも悲しいことがあったの？聴いて差し上げたいです。経済の王様であった「たまご」はもう高嶺の花。ぼくはしょうゆかけごはんで暮らしています。

(大岳 次郎)

▼泣き切った後のサツパリした卵かけごはんの丸い黄身に希望がみえてくるようです。後半のかな文字ばかりに前向きな明るい爽やかさが伝わってきました。
(竹内 朋子)

▼戦後生まれの私でも胸がつまる、何も言えない。(ちば つゆこ)

▼どれだけ悲しかったのだろう。心の声そのまま言葉になって伝わります。切ない思いを受け止めるたまごかけごはんの自然なあたたかさに救われました。
(平林 吉明)

ガタガタの足にのって山を下りてきた

泥谷 文吾

▼山道も自分の足もガタガタで下りてこられたのですネ、お疲れ様でした。ご自身のやり終えた、満足感を感じました。足にがんばれたね、と褒めてあげて下さい
(田中 直心)

日本勝てば私も頑張ろうと思ういちにち

ちば つゆこ

▼フェンシング選手みなさんの快進撃に元気を頂きました。

(佐川 智英実)

猛暑に負けめだか浮いている

荻島 架人

▼私も同様の光景を目にしました。哀れ……。

(無 一)

*長い間「泉」欄の投稿を支えていただいていた小山榮康様がお亡くなりになりました。ここに冥福をお祈りいたします。

●係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

へ送り先▽〒193・0832 八王子市散田町2・58・4

平岡久美子

メール izumi.jiyuritsu@gmail.com

※投稿先のメールアドレスはこちらに変更になっています。

へ締め切り▽ 2025年 2月10日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、自由律俳句協会のホームページや公式X、機関誌などでも紹介させていただきます。ありがとうございます。